

# 草庵仏教

第123号  
(発行日)  
2000年9月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 真宗問答 (その一)

Q 「宗教とは何なのかよく分からぬのですか」  
D 「宗教の定義は色々な名詞の雑多なものが現れてきます。そして宗教という名詞の中で現れていく。新聞沙汰にならぬような事件もこのところ多いですね」  
D 「ええ、それで宗教アレギにならぬって、宗教と聞くだけで敬遠する人も日本では多いですね」  
Q 「宗教は人間に必要なものでしょうか」  
D 「体に水や空気が必要なように、人間の心に宗教が必要ではないでしょうか」  
Q 「知識や技術を持ち、芸術や映画やスポーツなどの趣味や娯楽だけではだめなのですか」  
D 「たしかに、仕事をし余暇を趣味や旅行を楽しむというようなことで生きることはできます。しかし、人間の心は自分が考えている以上にもっと底の深いものではないでしょうか」  
Q 「人間の心は仕事や趣味や娯楽では充たされない部分があるのですか」  
D 「ええ、心には深層部分があつて、自分では気がつかない部分、その部分には、やむを得ず、知識や娯楽では満たすことが出来ぬ部分があるのです」  
Q 「その欲求とは、どんな欲

求ですか」  
D 「これは簡単な言葉では表現しにくいのですが、敢えていえば「一回限りの人生をまこととらしめたい」という欲求とでもいえるのではないのでしょうか」  
Q 「うーん、人生をまこととらしめたい欲求ね。分かるよ」  
D 「そうですね、もう少し身近にいえば、テレビを見ている最中にでも、ふっと「こうして時間が過ぎ、一日は終わって行く、二度とない私の人生活、本当にこうして過ぎていく」と心からの充足するもの、尊く喜ばしいものがあるのではないのでしょうか」という思いが湧くことがあるでしょう。何か魂の叫びのような、うずきのようなもの、そういうところから宗教的欲求の断面が現れていると思えます」  
Q 「少し分かる気がします。では、もともと宗教とは何なのか、分かりやすく教えてください」  
D 「私は、真宗大谷派の先覚者の清沢満之が「宗教とは有限・無限の一致なり」といっていました。この定義が分かりやすいと思います」  
Q 「有限というの人間のことで、無限というのとはどう違うのですか」  
D 「無限とは、清沢師の定義

での無限は「限りない良きはたらき」と理解していただきます。単に数量的に無限という意味ではありません。いわゆる、空間が無限であるとか、時間が無限であるとかという自然現象や物理現象の無限を単にさしているのではありません」  
Q 「「限りない良きはたらき」のことを無限という、それが神とも言われ仏ともいわれるのですか」  
D 「ええそうです。神といふはたらきを表そうとしても同じはたらきを表そうとしてもいいと思います」  
Q 「では、世界にいろいろな宗教があるのはどうしてですか」  
D 「この「限りなき良きはたらき」の現れ方や表し方が違ふからと人との関係の仕方が違ふからではないでしょうか」  
Q 「宗教とは、限りなき良きはたらきと人の一致のことなのですか」  
D 「真宗では、(限りなき良きはたらき)をどう呼んでいいのですか」  
D 「真宗では、(限りなき良きはたらき)をどう呼んでいいのですか」  
Q 「「良きはたらき」を徳というのとは分かりますが、具体的にどういふ徳ですか」  
D 「それは寿命と慈悲と智慧と無量の徳とは、無量の智慧と無量の慈悲と無量の智慧のことで、それを阿弥陀仏

と真宗では申します」  
Q 「ああそうですか、今までは阿弥陀仏とは、実体的な仏さんのように思ったり、何か神秘的で空想的なイメージで考えたりしてました。うちと智慧と慈悲のはたらきをいふのですか」  
D 「ええそうです。親鸞聖人は『浄土文類聚鈔』に阿弥陀仏のことを

寿命延長、よく量ることなし。  
慈悲深遠にして虚空の  
智慧円満にして巨海のごとし

と示されています」  
Q 「なるほど、まさにいのちと慈悲と智慧の量り無きもの、という意味ですね」  
D 「阿弥陀とはもともとインドの梵語であつて、それこそ限りないという意味です。仏とは完全なさとの徳あるものことです」  
Q 「清沢師が、有限・無限の一致が宗教であるといわれま

## 【 秋季彼岸会 】

9月22日 (金)

午後2時始まり

\*場所 念佛寺仏間

(どなたでもご自由にお参りください)

したが、そうすると阿弥陀仏との一致が真宗という宗教なのですね」  
D「ええ、そういつていいと思います。」

Q「阿弥陀仏と一致するということはどういうことですか」  
D「阿弥陀仏とであうことです。」

Q「阿弥陀仏とであえばどうなるのですか」  
D「仏とであえば、仏になるべき身と定まると言われています。それを親鸞聖人は「現生正定聚に入る」といわれます。そして、仏になるべき身と定まった人は、この世のいのちを終えて、浄土に生まれ

て仏に成るといわれています」  
Q「誰がそういつているのですか」  
D「仏説無量寿経における釈尊の説法にいわれています」  
Q「じゃあ、この人生においては、仏にあうことが救いであるということですね」  
D「ええそうです。阿弥陀仏とのあいこのことを、真宗では信心といえます。それで、親鸞聖人は信心を一筋にすすめておられるのです」

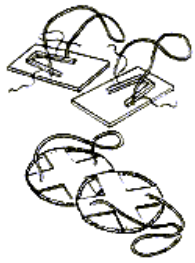
Q「聖人は、(仏とのあいこ)というようなことをいわれていますか」  
D「親鸞聖人のご和讃に

本願力にあいぬれば  
むなしくすぐるひとぞ  
なき  
功徳の宝海みらみらして  
煩惱の濁水へだてなし

とあります。ここでは阿弥陀仏のはたらきを本願力といっておられます。  
この和讃の意味は、「本願力にあえば、その人はもう空しく流転することはない。人生にまことの意味と充足を与えられる。無量の徳が私たちに働きかけ、与えられて、私たちの煩惱にさまたげられ、私たちがたえず、私たちが摂め取つてくださる」という意味でしょう」

Q「摂め取つてくださるとはどうなることですか」  
D「仏と離れない身となりまします。そしてこの世と人生における主(親)が仏であり、私は仏に従うべき客(子)という秩序におかれていることを知らされます」  
Q「仏が主であり、私が客であるということ、もっと詳しく教えてください」  
D「阿弥陀仏は救い手であり私は救われ手、仏は導き手であり私は導かれ手、仏は照らすもの私は照らされる者、仏は生かすもの私は生かされる者、です。」

分かります。人生は航海に譬えれば、人生は渡り難い海の如く、阿弥陀仏は運ぶ船のごとく、私たちは乗客の如くです。しかも船と乗客は離れていないのです」(続)



田下駄  
(C)SHOGAKUKAN  
INC.

## 念ずれば花ひらく

「念ずれば花ひらく」という言葉をよく聞きます。  
今回はこの「念ずれば花ひらく」と言う言葉を私なりに解釈して、考えてみたいと思います。

「念ずれば」の「念」とは仏教では「記憶して忘れないこと」という意味です。それで「念ずれば花ひらく」という意味を私は「心から思い続け、願い続けていくならば、その願いは実現していくものである」と読んでみたいと思います。そうするとこの句は「心から思い続け、願いを忘れないで、思い続けていく、そうすると自分からその願いにそって人生は展開していき、逆に、人生が自分の意に反するようになるなら、その人が自分の願いをずっと心に中で忘れずに念じ続けることをしなかつたからだ」と、そういう意味にこの言葉を理解することが出来ます。

もし、こういう意味なら、これは私自身の人生における経験上からも、そこそこ本當なのだと感じています。  
しかし、いかに念願するといつても「二百年も生き続けたい」というようなあまりにも非現実的な願いは念じても叶うはずがないし、あるいは「大もうけして、大邸宅でひだりウチワで生活したい」というような願望は、これを念じ続けても、利己的な野心が

強いから実現はおぼつかないと思えます。

反対に、念願し続けるものは内容が純粹であれば、それは案外本當に実現していくものではないかと、わりと真面目に感じています。

たとえば「困っている社会的弱者のために援助ができる弁護士になりたい」とか「ガンの苦しみを無くしていくための医学研究者になりたい」とかいうような、純粹な気持ちを伴った念願は、これを念じ続けていくならば、人生はそれを実現する方向へ自ずから進んでいくのではないかと、私はひそかにそう感じています。

そういう意味で「人は何を常に念じて生きるか」、これがその人の人生を方向づけていくのではないのでしょうか。

そして、何を念じているのが一番大事かと人から問われたら、端的に「仏を念じること」と、私は答えたのです。

真宗はもともと「念仏成仏これ真宗」で、「仏を念ずれば仏に成る、これがまことの宗教である」と。

いわば、阿弥陀仏にいたいとひたすら願つて「仏を念じていく」、すなわちお念仏を申していくならば、その願いにそって人生は展開して、願いの通りに仏にであい、ついには仏にも成るのだと思えます。

阿弥陀仏を、真実というてもよいし、限りない慈愛というてもよいし、限りないいのちと永遠なまことそのものであり

ます。  
この仏にであつて初めて人は心の底から充足する、まさに「いのちの花が咲く」のです。

さて、私どもが仏を念ずれば、なぜ仏にあえるのでしょうか。

それは、私が念仏を申すその南無阿弥陀仏には、私が仏を念じるに先立つて、阿弥陀仏が私を念じ、私を仏陀たらしめずにはおかぬと願ひ続け、念仏にこもっているからです。南無阿弥陀仏には阿弥陀仏の誓願力・念力がこもっているから、私が念仏申していけば、念仏にこもっている仏の願心が、念じる私に浸透してきて、ついには阿弥陀仏の大悲の心に気づかせていただくのです。すなわち仏とであうのです。これが信心です。親鸞聖人も「子の母をおもうがごとくにて

衆生仏を憶(念)すれば現前当来とおからず  
如来を拝見うたがわず」  
(浄土和讃)  
と仰せられています。憶するとは憶念すること、すなわち念じることです。

この和讃の心は、子が母にあいたい、母を念じ母の名を「おかあさん」と呼び続けるように、衆生が仏をしたい、仏を念じて仏名を称えていくなら、とおからず仏におあいすることが、必ずできるとの意です。

「念ずれば花ひらく」、仏を念ずれば、念じる人に仏のいのちの花がひらくのです。  
(了)

# 真宗聖典講座

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかに  
んとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏  
し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報  
を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなき  
ゆえに、無碍の一道なりと云々（歎異鈔第七章）

## 〈歎異鈔第七章第四講〉

今回は「罪悪も業報を感ずることあたわず」を  
読んでみたいと思います。

お念仏をいただいて生きる人生は「罪悪も業報を  
感ずることあたわず」と仰せられます。逆に、お念  
仏がないと「罪悪も業報を感じる」のであります。  
仏教ではしばしば因果の道理を説きます。それは  
いわゆる善因果、悪因果の道理のことです。善い行い  
をするとなれば報われ、悪い行いをするとなれば結果す  
るといふことです。因果応報ともいわれています。  
因果応報について私たちは、仏教での正確な意味  
を知らなくても、何となく素朴に信じているのでは  
ないでしょうか。

幼い頃親しんできた「日本のむかし話」にしろ、  
さまざまな童話にしろ、内容は因果応報的な物語が  
多いと思います。また両親からは「悪いことをした  
ら必ず痛い目にあうよ」といういましめをよく聞か  
されたことと思います。

それに実際上の経験でも、たとえば怒って人を殴  
ると、仕返しにあつたり、周りから非難されたりし  
て苦しい立場に置かれるし、また人に親切な行いを  
すると、自分自身も気持ちがいいし、また人からも  
ほめられたり、人の信用を得たりする経験から、私  
たちは因果応報的なことを体で感じています。

仏教でいう「因果の道理」をたとえ正確に理解し  
ていなくても、私たちには因果の考えがかなり身に  
しみついていて、私たちに思えます。これは日本だけではな  
く、同じような考えは世界中にあると思えます。

一神教の伝統の国では、「善いことをすると神様が

喜んでご褒美をくれ、悪いことをすると神様から罰  
を与えられる」という考えが人々の心の中にあるよ  
うに思えます。

ところで、私たちにおける因果応報という考えは、  
殆どの場合自我心（功利心）と結びついていて、  
するとどうなるかといえ、善をなせば幸福になり、  
悪をなせば不幸になる」という世間的・道徳的な幸  
福論になってしまっています。

これは、仏教における善因果・悪因果とは内  
容的にいささか相違があります。仏教でいう善は、  
世間的な安楽とは違つて涅槃に連なる樂であります。

さて、自我心と結びついた因果応報では「善をな  
せば私は幸福になる」という考えとなります。「人に  
親切をしておけば、私が困ったときには助けてもら  
える」とか「神社や寺に寄付をする功徳を積めば、  
神仏のおかげを貰える」というような考えになりま  
す。そうした善行は、功利心（煩惱）の汚れが混じ  
つたもので純粹な善とはいえません。

逆に「悪をなせば不幸になる」という考えでの生  
き方は、「常に悪をおそれる」生活であります。悪い  
ことをしてしまつた時その報いを怖がり、今ま  
で為した悪業の結果が何時か現れるのではないだろ  
うかという不安をもつたりします。また、例えば病  
気になつたり、事故になつたりすると、「こ  
れは私の悪業の報いではなからうか」とおそれたり  
します。それはやがて、「自分には分らないほどの  
罪を過去に重ねてきたのだから、死後は地獄へ落ち  
るのではなからうか」という恐怖ともなります。

その怖れる心には自我心（我愛）があるとと思いま  
す。すなわち「我が身を守り、我が利益を確保し、  
我が身の安全をはかり、我が身を愛する」という我  
執・我愛に強く影響されているからです。

私たちが日頃、つまらぬ事したり悪をなしたり  
すると、後悔の念が起ります。それは、悪そのもの  
を慚愧することよりも、悪をなした事によつて、私  
は不利益を将来こうむるのではないか」とか、報い  
やバチがあたるのではないか」といふ、そういう自  
分の利害を案じての後悔や恐れではないでしょうか。  
「おぼろかしい、もうしわけないことをした」と純

粋に懺悔することより、「しまった。悪い結果になら  
ねばいいが」という功利的な関心からの不安や後悔  
が中心となつていて、思ひます。

要するに「善をなせば幸福になり、悪をなせば不  
幸になる」という生き方は、人間を本当に自由無礙  
にするものではありません。己の罪悪の報いを怖れ続  
ける考えです。

悪にたいしては、これをできるだけ慎みたいと願  
い、悪をなしてしまえば「まことにもうしわけない  
こと」とすなおに慚愧することは、お念仏の生活に  
は当然強まりこそすれ、減じるものではありません。  
そして、己の悪につけてもお念仏がもうされていく  
生活は、己の悪による不幸を怖れたり心配したりす  
ることから解放されて参ります。慚愧こそすれ、己  
のなした悪の報いを感じて苦しんだり不安を感じた  
りするのでなく、己の悪につけても、阿弥陀  
仏の「いかなる状況に汝が落ちようとも、撰取して  
すてない。私がついていけるぞ」との大悲を仰ぎ、己  
の悪を慚愧しつつ、悪の結果を引き受けていく力を  
たまわります。もはやそこには不幸は超えられて  
いるのです。罪悪を行えば因果応報の道理によつ  
て、その報いは来ます。しかし、どのように重い業  
報も、阿弥陀仏の「撰取不捨の利益」というこの上  
ない幸いを壊すことはできないのです。

悪業の報いの及ばない自由を念仏の信心からたま  
わります。因果応報を超えた自由を念仏の信心は知  
つていけるのです。

聖人が「それがし（私）は善もほしからず、悪も  
おそれなし」といわれたのは、因果応報を超えた自  
由の天地に出ておられるところからの発言です。お  
念仏は私どもにこのような自由を与えて下さるので  
す。歎異鈔第一章の「悪をもおそるべからず」とい  
われたのも同質の言葉です。

「悪をもおそるべからず」というのは決して善悪  
因果の道理を否定するものではありません。否定する  
のは因果応報にまわりついていて我執我愛の自我  
心であります。いわんや「悪はおそれずにやり放題  
にせよ」ということでは全然ありません。これは造  
悪無碍の邪見として親鸞聖人がつとにおいさめくだ  
さつたことです。

# 一蓮院秀存師の言葉

「信次郎よ、昔は山寺がうらやましかつたり、鼠衣が恋しかつたり、よろこび心がほしかつたりが、そんな心がつづいたならば、つづく心をつづく心にして、またも迷うていたのに、今はたのみにする程の心がないゆえにお慈悲一つがたのまれるようになったぞよ」（「秀存語録」より）

これは一蓮院秀存師の言葉である。師は大谷派の名師として聞こえたお方である。一七八八年（天明八年）に生まれ、七十三才で往生された。深い信心と学問のあるお方であった。香月院講師に学び、同門の香樹院師について、きわめて謙虚な心で聞法に生涯を尽くされた方である。他者に説いて聞かすよりも、まず自分自身に仏法を引き当てて味わうという風で、多くのお同行から慕われた。

信次郎は高野信次郎といい、一蓮院師をしたい、師の生活のお世話を長年された甚だ熱心な信者である。

「山寺がうらやましかつたり、鼠衣が恋しかつたり」というのは、求道心の強い修行僧が人里離れた山寺で清らかな修道生活をしているのを見つけたら、「ああ、自分もああいう清浄な生活がしたいものだ」と羨ましくなるのである。ごく質素な鼠衣を着て、釈迦の弟子のごとく、戒律を保ち托鉢しながら、少欲知足の簡素な生活をしておられる姿を見るにつけても、ああなりたいものだと思はれる。特に若いときは理想心が強く、ああいう清浄な生き方をしたいとあこがれるものである。

昔私も、宗教的で清らかな修道生活をしている人に何人も会った。そういう人たちを見ると羨ましい。私自身のふがいなさに情けなくて泣いたこともある。しかも、何とか自分もがんばればあの人たちのような生活が出来るのではないかとさえ、自分を買ひ被

つていた若い頃には、思つてしまふのであつた。

昨年、イタリアのアッシジに行った。アッシジは聖フランシスの生誕地として、キリスト教の聖地である。行つてみると、実に清らかな場所だ、フランシスのような聖者が生まれた訳も分かるような所である。フランシスコゆかりの教会があり、中に入つてみると大きな洞窟のような聖堂で多くの人がお祈りをしていた。その中に修道僧が数人いたが、見るからに清らかな人たちである。一生独身で、祈りの生活に明け暮れているのである。見ていて羨ましい気分が久しぶりに胸中に湧くのをおぼえた。

しかし、今はそういう人たちの真似は到底出来るものではないと断念しているのだ、嘆くことも悲しむことも、羨ましさに煩うこともない。一蓮院師とて同じであろう。

次に一蓮院師は「よろこび心がほしかつたり」といつておられる。私たちは聞法に志すと、喜ぶ心や嬉しい心や、有難い心などの宗教的な心情がほしくなり、そういう心が起ると「これで私もだいぶ仏法が身に付いてきた」と思つて嬉しくなつたりする。時には「こういう有難い気持ちで生活できるのはすでに助かつた印である」と思つて、有難い心や尊い心が起ると、それが救われた証拠のようにつかみ取れるのである。ところが救われた証拠のようにつかみ取れない。そのうちに何ともなくなる。そうなる、今までの信心はどこにいったやらと寂しくなつたり嘆いたりする。こういうことが聞法の人生には繰り返されてくる。中には、何とか有難くなりた、何とか分かりたい、何とかかすつきりしたいと、自分の心が何とかなるように思い、聞法の方向を誤つたままで一生を送ることもあるのである。

しかし、一蓮院師は、有難い心や慚愧の心などの尊い心が続かないので良かったと仰せられる。そんな心が続くとついついこの心にだまされて、弥陀をたのまずに自分の心をたのんでしまふ、と。有難い心が続かないからこそ、たのみにする程の心はなく、我が心にまつたく愛想をつかして、ひとえに弥陀のお慈悲一つをたのむばかりである、と。強い求道心とか喜び心とか、たのみになりそうな心が続かないのが有難いというのが味わい深い。

山寺も鼠衣も、そのような生活は到底私の及ぶも

のではない。何時までたつても、あいもかわらぬお粗末な浅ましい生活しか、とてもできない私。そんな私目当てに起こしてくださつた弥陀の誓いに助けられてみれば、もう山寺も鼠衣も羨ましくはない。弥陀のお慈悲一つが慕われるばかりである、とのお心であろう。

(了)